

## 新刊紹介

### Andrew Francis 著 *Culture and Commerce in Conrad's Asian Fiction*

Cambridge University Press, 2015. xvii + 278pp.

設楽 靖子

本書のタイトルからは、論じる対象がコンラッド作品のうちの“*Asian fiction*”であり、切り口が“*culture and commerce*”であることは明白であるが、本書の強みを一言で言えば、「コンラッドの *Asian fiction* に書き込まれた *commerce* に注目し、かつ、「それらの作品群の主要舞台である Dutch East Indies (オランダ領東インド) の文脈に位置付けて論じた、今までで最もまとまった研究」(5)である。方法としては、当該地域に関する一次資料(新聞、雑誌、植民地関係の公文書、旅行記など)を渉猟し、コンラッドの東洋体験の諸事実・背景と作品との関係を読み解く。そう聞けば、Norman Sherry 著 *Conrad's Eastern World* (1966)が思い浮かぶが、本書の特色は、この 1960 年代の先行研究に敬意を払いつつ、「この地域に関するコンラッド研究においてオランダ語史料が必須であるにもかかわらず、それらは言語上の制約から無視されてきた」(188)事情をふまえて、このアプローチをオランダ語の一次資料の探索に広げた点にある。著者はビジネス界出身という背景を生かし、“*commerce*”という概念を中心に据え、かつオランダ語文献を読み込んだ研究成果である。著者がケンブリッジ大学に提出した博士論文に基づく。

本書のキーワードである“*commerce*”は、「商業、商取引、売り買いによる交換、交易」という日本語に相当するであろうが、このキーワードは、ことコンラッドの“*Asian fiction*”を読み解くにあたっては、イギリス・オランダの植民地勢力とアジア人商人たちが拮抗する複層的な有り様を分析するに有効であり、かつ「売り買い」の対象として火薬(*gun powder*)や人身売買(*slaves*)もトピックに挙げることを可能にする用語である。「売り買いの営みを通して富の生産と分配がなされる」(179)、それが個人の生活を規定しており、コンラッドの“*Asian fiction*”はその実態と変容を描きこんでいる、というのが本書のテーマである。

まず、著者は、本書のタイトルにある“*Asian fiction*”を定義するにあたって、Robert Hampson 著 *Cross-cultural Encounters in Joseph Conrad's Malay Fiction*

(2000)などで使われている“Malay fiction”という括り方との違いを示す(5)。つまり、“Malay fiction”という括り方は、マレー世界を舞台とする作品群を指し、インドを主要舞台に含む *Lord Jim* や、バンコク・シャム王国を舞台とする“Falk”や *The Shadow-Line* が含まれなくなる。当該地域の“commerce”をキーワードにコンラッド作品を論じるにあたってこれらの作品を外せないという判断により、“Asian fiction”という括り方を選んでいる。ゆえに、本書で扱う主要作品は、*Almayer's Folly*, *An Outcast of the Islands*, *Lord Jim*, “The End of the Tether” “Falk,” *Victory*, *The Shadow-Line*, *The Rescue* の8点となり、それぞれに1章を与えて8章構成とし、各章が“commerce”の関わりで論じられる。加えて、短編“*Freya of the Seven Isles*,” “*Karain*,” “*The Lagoon*,” “*Because of the Dollars*”の4作品が、関連の章で追加考察されている。地域的には“Asian fiction”にあたる他の短編(“*The Secret Sharer*,” “*Typhoon*,” “*Youth*”)は、“commerce”との関わりが少ないとの理由で、本書では考察対象となっていない。

序章では、「政治的背景」として、当該地域がイギリスとオランダによる植民地分割が拮抗する現場であったこと、イギリスがシンガポールを自由港とした結果、ブギス、アラブ、中国人交易者たちが、それ以前の独自の交易ルートを変更したことなどを挙げる(19)。「商業的背景」としては、「帆船から蒸気船への移行」が、単に動力の変更ではなく、その担い手が「個人で帆船を所有し船長として交易にあたる captain traders から、決められたルートを定時航行する蒸気船の雇われ船長へ」という変化をもたらしたことを、重要な点として挙げる(23)。

そのうえで、章立てでは、まずは *Lingard* 三部作、次に *Lord Jim*, 続いてバンコクを舞台とする“Falk”と *The Shadow-Line* を挟んで、最後に“The End of the Tether”と *Victory* を論じる。バンコク以外の主要舞台は、その多くが明確にオランダ領東インドに設定されているだけでなく、辺境地 *Sambir*, *Patusan*, *Samburan* のいずれも、「実際の場所がどこであるかが地図上で特定されていなくても、その空間は政治勢力図の中で明確に定義されている」(83)、という前提である。著者は、その実情をあぶり出すべく、丹念にテキストを読み、関連パッセージを抽出し、資料で裏付けていく。以下、筆者が関心を持った点を抽出する形で述べる。

まず、第1章では、「商業、および植民地主義の末端“Commerce and the Edge of Colonialism”」とのタイトルで、*Almayer's Folly* を扱う。キーワードは“edge”、つまりイギリス・オランダの拠点となる植民地都市(シンガポールやバタビア)から離

れているがゆえに実質的支配が及んでいない「端・縁・はずれ」で進行する商業活動に注目する。コンラッドが乗務した *Vidar* 号が 1885 年当時のオランダ植民地史料の中では、「シンガポールからオランダ領へ武器を密輸しているイギリス船」(37-38)としてマークされていたことも、オランダ語の一次資料から明らかになる。

第 2 章では *An Outcast of the Islands* を扱い、たとえば、この島嶼世界の「正統ではない交易“transgressive commerce”」の代表的担い手として、Abdulla, Hudig, Lingard, Willems が挙げられている。

第 3 章は、「否応ない進歩に抗って“Standing out against the Irresistibility of Progress”」と題して、*The Rescue* を取り上げる。コンラッドの“*Asian fiction*”の中で「最も地理的な広がりを持つテキスト」(65)として、商業・政治の転換期の事情を反映する作品と位置づける。たとえば、著者は、“a big New York ship, loaded with oil in cases for Japan” (Part II, sec. 4)というパッセージに注目する。カリマタ海峡の隔離された海岸沿いで、ニューヨークから日本へ「オイル」を運ぶ蒸気船が目撃される、その場面について、著者は、「“オイル”は北の方で台頭する日本、その西洋化政策や帝國的野心を伝え、“ニューヨークの船”は太平洋の向こうの合衆国による商業的影響を伝える」(68)と読み解く。

第 4 章は、「商業と道義の網(わな)と交渉する“Negotiating the Nets of Commerce and Duty”」と題して *Lord Jim* を扱う。辺境地 Patusan は、そこがどこであるかは明示されていないが、地図上には明らかに存在する空間である。ゆえに、Jim が「誰にも知られない場所」に身を隠そうとしても、“commerce”のネットワークからは逃れられない。そのことを、著者は、テキスト中の“*They sighted mail-boats moving on their appointed routes*” (*LJ*, Chap. 38)というパッセージに注目し、Patusan (実際には Tenom という土着国)がいかに辺境地のようであっても、「オランダの郵便船(KPM = Royal Packet Company)のネットワークがすでに整備されていて、その航行ルートが近い」地点であることを、オランダ語史料から示す。たとえば、Rajah Allang の“*Were the Dutch coming to take the country?*” (*LJ*, Chap. 25)という発言は、土着国 Tenom がオランダの直接支配に入る時期が 1899-1901 年であることと呼応する(93)、と説明する。また、Chester 船長の「*guano*(糞化石)の島」のエピソードを“*transgressive business*” (110-12)として注目し、あるいは Stein による“*every plant and tree of tropical lowlands*”の収集は個人の収集スケールを超えて植民地経営と関わる Buitenzorg Gardens を連想させる(113)、と論じる。

第 5 章と第 6 章は、バンコク・シヤム湾を舞台とする “Falk” と *The Shadow-line* を扱い、この 2 章はバンコクにおける西洋との交易を中心とする間奏章となる。

“The End of the Tether” を扱う第 7 章は、Whalley 船長の窮状を表現した “irreducible minimum” を章タイトルとし、「儲けが最小限にまで減らされた」老船長の不運を分析する。つまり、「勝ち組 3 者」は、政府機関で雇用されることを選んだ Elliot 元船長、プランテーションを営む van Wyk、いち早く蒸気船ルートを開拓した Gardener & Patterson 商会であり、一方、「不運な負け組 3 者」は、帆船時代の美德・功労を象徴する Whalley 船長、その娘 Ivy、マニラでのギャンブルにしか活路がない機関士 Massy となる(152-53)。

最後第 8 章の *Victory* 論では、「商品の台頭“The Rise of the Commodity”」のタイトルのもと、石炭採掘事業に焦点を当てる。Heyst の島での炭鉱事業について、Labuan 島（ボルネオの北西、香港とシンガポールの間地点）に実在した The Eastern Archipelago Company という石炭開発会社との類似・連想を提示している(165-67)。ちなみに、本書の巻頭には 19 世紀中頃のこの会社の広報用ポスターが掲げられている。また、コンラッドは Schomberg のホテルをスラバヤに設定し、そこを小説の起点としているが、それは、当時のスラバヤがオランダ東インド植民地の中で「中心的な工業都市」であり、「オランダ籍以外の船が交易に入れる、数少ない都市の 1 つであった」(161)という事実が背景にあることを示す。

この紹介文の冒頭で、N. Sherry の *Conrad's Eastern World* に言及したが、この 1960 年代の著作が「コンラッドの東洋体験の諸事実・背景を資料面から明らかにする」に留まっているという限界があるとすれば、本書は、“commerce” という明確な分析道具を使い、コンラッドの体験および作品をイギリス・オランダ勢力圏の境界という地政学的諸条件の中に位置づけることを意図した研究であり、それは、1960 年代～2010 年代の半世紀のあいだに蓄積された当該地域に関する歴史研究を反映しているといえよう。本書は、Sherry 本を発展・継承したものであると同時に、その違いは文献目録を見るだけでも明白である。

なお、本書については、Gene Moore による紹介文がイギリス・コンラッド協会の HP にて入手できる。コンラッド作品にみるオランダ領東インドの事情に精通した評者 (slaves についての論文もある) による、簡潔にして周到な紹介である。